

The Location Around The World

行ってみたいな名作の舞台へ…



volume 2 (UK/Europe/China)

CHIHIDE MATSUMURA



THE CAVERN
MATHEW STREET
QUARTER

■若き日のビートルズが闊歩しただろろマシュー・ストリート



ビートルズを輩出した街、リバプール ちょっと鄙びた街並みが味わい深い

②7リバプール(イギリス)

映画のロケ地ではないけれど、ロック界伝説のグループ、ビートルズが生まれた街、リバプール。イギリスの北西部、マージ川河口の港町であり18世紀頃からイギリスの主要な交易都市として発展していった。しかし1950年代以降の不況に伴って都市としては急速に斜陽化してゆくのだが、それと反比例するがごとく世界中にその名を馳せる出来事が起こる。それが伝説的ロックンロール・バンド、ビートルズの誕生だ。今から半世紀以上前の1957年7月6日土曜日、郊外のセントポール寺院で行われた夏祭りに「クオリーメン」というアマチュアバンドが出演する。そのバンドのリード・ギターが、ジョン・レノンだった。そして、友人に誘われその場に来たもう一人の少年が、言うまでもなくポール・マッカートニー。時にジョン16歳、ポール15歳だったという。この出会いが、世界の音楽界の歴史を塗り替えようとは、その場にいた誰もが想像だにしなかつただろう。運命的な出会いから二人はこのリバプールの地で「ビートルズ」を結成し、世界的なヒット作をリリースしていく。その活躍の場として有名なのが、マシュー・ストリートにある「キャバーン・クラブ」だ。酒蔵を模して造られたその小さなライブハウスに連日連夜、熱狂的なファンが押し寄せたという。惜しくも当時のクラブは取り壊されてしまったが、そのすぐ横に忠実に再現されて、今も多くのビートルズ・フリークが集まってくる。

ここ「キャバーン・クラブ」だけでなく、リバプール市内には様々なビートルズにゆかりの深い場所が点在している。名曲「ストロベリー・フィールズ・フォー・エバー」のストロベリー・フィールドや「ペニー・レーン」に歌われた小径。4人が育った家も現存している。市内中心部からだとは徒歩ではちょっと遠いのでバスツアーがおすすめ。ビートルズの曲にちなんだ「マジカル・ミステリー・ツアー」という名前で、約2時間位かけてそれぞれの場所に連れて行ってくれる。また港のアルバート・ドックには「ビートルズ・ストーリー」という博物館があって、ヘッドフォンの説明を聞きながら、ビートルズの歴史を辿ることができる。日本語もあるのでわかりやすい。

そんなビートルズ一色のような街、リバプール。ロンドンよりも適度に寂れた港町の感じが街中に残っており、雰囲気はなかなかのもの。イギリスに行こうと思っている人は、是非とも立ち寄って欲しい街だ。



■ Strawberry Fields Forever!



■ ペニー・レーンも観光客に人気



■ ポールの実家のこの人、似てない??

ピーター・ラビットに出逢える 「ミス・ポッター」の棲家、ヒル・トップ

⑳湖水地方(イギリス)

前回のリバプールから北へ約140キロ、車でハイウェイを約1時間半ほど走ると、水と緑に囲まれたLake District(湖水地方)が広がり始める。その名の示すように多くの湖が点在する国立公園エリア。絵画のような田園風景はイギリス国内だけでなく世界中の観光客に人気が高い。その湖水地方で一番大きな湖ウィンダミア湖畔のウィンダミアからフェリーに乗って辿り着けるのがニア・ソーリー村。この本当に小さな村が、世界中で愛されているウサギちゃん、ピーター・ラビット物語の舞台だ。来月中旬からロードショー予定のレニー・ゼルフィガー主演「ミス・ポッター」は、そんなピーター・ラビットの生みの親、ビアトリクス・ポターの半生を描いた秀作で、湖水地方でのエピソードも出てくる。ロンドンの裕福な家庭で育った彼女は子どもの頃から夏になると、避暑旅行で湖水地方やサウス・ウェールズで過ごしていた。その頃の豊かな自然体験があのかのピーター・ラビットの物語を生んだのだ。そして、彼女が生涯の家として選んだのも、ニア・ソーリー村のヒル・トップ。この辺りはナショナル・トラスト運動の先駆けともなったところで、彼女が絵本の収入でナショナル・トラストに委託したのは実に15の農場と東京ドーム344個分もの土地。そのおかげで、100年以上経った今でも、当時のままの姿が残されている。ここの風景は彼女の絵本にたびたび登場するので、映画のロケーションだけでなく、絵本を片手に歩くのも楽しい。ヒル・トップの家では「グロースターの仕立屋」で登場する柱時計や、「こねこのトムのおはなし」の鏡などを見つけることができる。また、彼女が使っていたままの寝室や居間も当時のままに展示されている。

ミス・ポターのニア・ソーリー村だけでなく、湖水地方は詩人ワーズワースにゆかりの深いグラスミア、思想家ジョン・ラスキンの終の棲家があるブラントウッドなど多くの文筆家を魅了してきた。緑と水に囲まれた広闊で静穏な景色の醸し出す空気が、彼らの五感を刺戟したに違いない。そんな風景が歴史を超えてそのままに残っていることが嬉しい限り。日本の都会で生活していると、イギリスの田園風景が最高の贅沢に思えてくる。流行のファッションを気にしたり、最新のゲームやIT情報を手に入れることに躍起になるより、人間としてもっと大きな何かを得ることができるかもしれない…湖畔に佇んでいると、そんな気にさえなってくるから不思議だ。





■絵に描いたような田舎道が続く…でも、ちょい退屈かな



■「あひるのジマイマのおはなし」に登場する建物



■これがポターが愛した景観

かのシェークスピアが生まれた家がある ストラスフォード・アポン・エイヴォン

②9ストラスフォード・アポン・エイヴォン(イギリス)

今回も映画のロケ地ではなく番外編。前回、ピーター・ラビットの生みの親ビアトリクス・ポターにゆかりの深い湖水地方をご紹介したが、さらに偉大な英国の作家といえば、ウィリアム・シェイクスピア。世界中でその名を知らない人は、多分一人もいないだろうと思えるほどの歴史的な劇作家。彼にゆかりの深い町が、ロンドンから電車で2時間半、北西へ約170キロ、バーミンガムにほど近いストラスフォード・アポン・エイヴォンだ。エイヴォン河畔にある閑静なこの街で、シェイクスピアは生まれ、そして骨を埋めた。とはいえ、それは遙か400年以上も昔の話。日本では織田信長が天下を収めていた時代。その頃のシェイクスピアの生家や、夫人のアン・ハザウェイの家などがそのまま残っている。リバプールのジョン・レノンの生家も感動ものだが、シェイクスピアの生家となると、現存していることだけで感慨もひとしおだ。

前回のニア・アーリー村のように町全体が昔のままなのではなく、道路は近代化されクルマやバスも普通に走っているが、それでも建物は多くが当時のままや改修されながら中世の面影を残している。15世紀に建てられたというホワイト・スワン・ホテルや、現存しているイギリスのパブのなかで最古と言われるギャリック・インなど当時そのままの生活を旅行者が体験できるから凄い。400年も100年も、時間の感覚が分からなくなってしまうが、「信長がよく通った店で同じ酒が飲める…」なんて考えたら、その重みがよく分かる。シェイクスピアの生家には彼が生まれ育った当時を実物とレプリカで再現され、彼が寝ていた天蓋付きのベッドもそのままに展示されている。

このストラスフォード・アポン・エイヴォンからすぐ近くには、イギリスの中でも屈指の美しい村々が点在するコッツウォルズ地方がある。蜂蜜のような優しい色の建物が並ぶチッピング・カムデン、コッツウォルズのヴェネチアと呼ばれるポートン・オン・ウォーター、バイブリー、カースル・クーム…と、町自体は小さいが本当に美しく保存された村々を廻るのは感動モノ。フィルム(いやいや、今はメモリー…)が幾らあっても足りないほど被写体には事欠かない。レンタカーで廻るのがベストだが、道がほんと細いので小さめのクルマがいい。MINIのコンバーチブルなんかで木々に囲まれた山道を走れば最高の気分を味わえる。バスツアーも楽ちんでいいけど、たまにはそんな旅もお薦め。悠久の歴史を超えた街並みや空気を感じながら、最高に贅沢な時間を楽しんでみたいものだ。





■これぞ!シェイクスピアが生まれた家



■シェイクスピアの通ったパブの店内



■ひょっとすると同じメニューを食べていたかも…



■蜂蜜色の街…とはほんとはよく言ったものだ



■英国で最も古い街並みが保存された村、カースル・ワーム



■泊まったホテルもトラディショナル

■駅も面白い感じ



■ストラスフォードは暮らしやすい街だ

「アマデウス」の栄光と苦悩が 今も息づく街、ウィーン

⑫ウィーン(オーストリア)

2006年の幕開け。オーストリアではそんな今年、モーツァルト生誕250年を祝ったイベントが各地で目白押しだ。モーツァルトに関する映画といえば、1984年のアカデミー賞で作品賞をはじめ10部門でオスカーを獲得した大作「アマデウス」に尽きる。天才音楽家としてその名をはせながら35歳という若さでこの世を去ったウォルフガング・アマデウス・モーツァルトの生涯を描いた作品。優雅で気品あふれるその音楽とは裏腹に、意外にも破天荒な生き方、そして未完成の「レクイエム」にまつわるミステリアスな死…というストーリーに意表をつかれた方も多いはず。

そんなモーツァルトが人生の大半を過ごした街がオーストリアの首都ウィーン。しかし、映画では室内のシーンが多く、街並みのイメージは希薄であったし、それ以上に18世紀と現在とではあまりにも時が経ち過ぎている。それでもウィーンには、モーツァルトにまつわる遺産が数多く残っている。

まず、モーツァルトがチャームな妻、コンスタンツェと結婚式を挙げたシュテファン寺院。現在でもウィーンのシンボリック的存在であり、オーストリア最大のゴシック建築物。この巨大な大聖堂はモーツァルトの人生のスケールの大きさを暗示しているかのようだ。時の皇帝、ヨーゼフ2世が暮らしていたホーフブルク王宮の裏庭には、今も誇らしげにポーズをとるモーツァルト像が立っている。モーツァルトは皇帝への謁見で何度も足を運んだに違いない。また、彼が1784年から4年間住み、「フィガロの結婚」が濼作曲されたといわれているドームガッセ5番地の家は、「モーツァルトハウス」としてリニューアルされ、来週1月27日、オープニングパーティーが開かれるそうだ。そしてマリア・テレジア女帝やエリザベート皇后が暮らしたシェンブルン宮殿。ここの庭園オランジェリーで、1786年、宿敵?アントニオ・サリエリとの間で「音楽コンテスト」が行われたそうだ。

ウィーン観光のハイライトでもあるウィーン国立歌劇場(オペラ座)は、残念ながら映画で度々登場した国立劇場ではなく、モーツァルトの死後19世紀になって建築されたものだ。しかし天才が遺した名作の数々は毎年、この由緒ある歌劇場で上演され、今も観客を魅了し続けている。今年も「魔笛」「ドン・ジョヴァンニ」「フィガロの結婚」など、大作オペラが上演される予定。今もそんなモーツァルトの魂が息づいている街、ウィーン。特にモーツァルトイヤーの今年は様々なイベントが開催される。ぜひとも訪れてみたいものだ。





■国立歌劇場(オペラハウス)は再建されたもの



■シュテファン寺院はでかい!



■モーツァルト関連のお土産屋さん



■市庁舎前のクリスマス市は「光のルネサンス」のヒントに

世界でも最も美しい町のひとつ モーツァルトが生まれ育ったザルツブルグ？

⑬ザルツブルグ(オーストリア)

前回のウィーンに引き続き、モーツァルト生誕250年祭で沸くオーストリア、なかでもモーツァルトが生まれ育った美しい町ザルツブルグをご紹介します。映画「アマデウス」では、ザルツブルグでのシーンこそあまり出てこなかったが、モーツァルトが25歳の時にウィーンに移り住むまで生まれ育ったのがこの町なのだ。ウィーンから東へ300キロにある人口14万人ほどの小さな町。しかし、その名はモーツァルトの故郷として知れ渡り、一年中世界中からの旅行者が押し寄せる。そして、そんな旅行者を裏切ることない本当に美しい古都だ。

中心を流れるザルツァッハ川沿いに二分されるように新・旧市街が広がり、どちらにも名所旧跡が点在する。特に旧市街のメインストリート、ゲトライデガッセのほぼ中心に建つ、黄色いアパートメントがモーツァルトの生家。ここの4階がモーツァルトが生まれた家で、自筆の楽譜や手紙、ピアノフォルテ(ピアノの正式名称はピアノフォルテ…音の強弱(f・p)が出せる鍵盤楽器という意)などが展示されている。ザルツブルグ観光No.1スポットとして、いつも観光客でごった返している場所。まあ生家だけでなく、このゲトライデガッセはどっこも人で溢れてはいるが、そのワケは趣きのある中世そのままの町並み。その奥にはホーエンザルツブルグ城が断崖絶壁にそびえ立っている。超急斜面のケーブルカーで到着する城塞からはザルツブルグの街並みが一望できる。

川を挟んで新市街にはモーツァルト一家が1773年から1787年まで住んでいた家も保存されピンク色のかわいい博物館になっている。このあたりも新市街とはいえ、とっても雰囲気の良いエリア。まずは「美しい眺め」という意味のミラベル宮殿が必見。彫刻がほどこされた「天使の階段」で2階にあがると豪華なマルモアザール(大理石の間)が広がる。なんと、ここでモーツァルト一家が演奏していたそうだ。だがこの宮殿いちばんの眺めはその庭園。ああ…と記憶を呼び起こされた方もいらっしゃるかも。そう、この庭園こそ、あの名画「サウンド・オブ・ミュージック」の重要な場面で登場した場所なのだ。次回は、そのあたりをじっくりと…





■こちらは後の住まい



■街の中心を流れるザルツァッハ川



■断崖絶壁のホーエンザルツブルグ城

不朽の名作「サウンド・オブ・ミュージック」 世界中からファンが訪れる古都、ザルツブルグ

⑭ザルツブルグ(オーストリア)

今回はザルツブルグ第2弾。オールドファンなら誰もが知っている名画中の名画、「サウンド・オブ・ミュージック」。ロバート・ワイズ製作・監督、ジュリー・アンドリュース主演、そして作曲にリチャード・ロジャース、作詞にオスカー・ハマースタイン2世を配したミュージカルの傑作で、1965年のアカデミー賞5部門受賞を果たした。この物語はマリア・フォン・トラップ原作による実話に基づいており、その主な舞台はザルツブルグ周辺。実際の撮影も、多くがこの美しい町中で行われた。その風光明媚さも手伝ってか世界の映画ロケ地のなかでも特に有名で、世界中からトラップ一家のファンが押し寄せてくる。

まず、市内の名所であるミラベル宮殿から訪れてみよう。幾何学的に手入れされた植栽が見事な庭園で、あの有名な「ドレミの歌」の後半のシーンが撮影された。

その後は旧市街へ。多くの旅行者はマカルト橋を渡るのだが、是非とももう少し東側の小さな橋、モーツアルト小橋まで行って欲しい。ここもマリアと子供たちが歌いながら渡ったシーンに出てくる。そこを渡って旧市街に入るとすぐ、マリアが「自信をもって」を歌ったレジデンス広場、そしてトラップ一家が感動的な「エーデルワイス」を歌って逃亡を図る音楽祭のシーンが撮影されたフェルゼンライトシュレー、そしてクライマックスで墓地に隠れるシーンの舞台、聖ペーター教会の墓地がある。が、実際の墓地シーンは、ここに似せて作ったハリウッドのセットで撮影されたそう。郊外にはトラップ家の黄色い壁の大屋敷、マリアがいたノンベルグ修道院、モントゼーという町にはトラップ大佐と結婚式を挙げた教会もある。そして、旅のハイライトはなんといってもオープニングやピクニックシーンで有名な大自然のザルツカンマーグート。ロケ地巡りを忘れてしまうほど雄大な自然は圧巻。ザルツブルグを訪れたら、是非とも足を伸ばして訪れて欲しい。



■ラストシーンの聖ピーター教会の墓地



■子ども達と渡った橋



■クリスマスマーケットもいい感じ



■車で20分位のオーベルンドルフに「きよしこの夜」の生まれた教会がある



■何でもないけど、なんか美しい



「存在の耐えられない軽さ」を生んだ街、プラハ 色濃く残る中世の街並みは映画関係者好み

⑮ プラハ(チェコ共和国)

前々回に採りあげた名作「アマデウス」はウィーンやザルツブルグが舞台だが、実際に映画が撮影されたのは、実はチェコ共和国のプラハだったのをご存じだろうか。というのもプラハには中世そのままの街並みが広範囲に色濃く残っているからだ。その意味ではザルツブルグ旧市街もなかなかのものなのだが、そのスケールは比ではない。プラハ市も映画撮影には非常に協力的で、ハリウッド映画関係者にとって引っ張りだこのロケーション・サイトなのだ。

そんなプラハを舞台にした映画といえば、ちょっと通好みかもしれないが1988年、フィリップ・カウフマン監督が世に送り出した「存在の耐えられない軽さ」。チェコの作家ミラン・クンデラのベストセラー小説を映画化した作品で、当時、惜しくも受賞までは至らなかったもののアカデミー賞やゴールデングローブ賞など軒並みノミネートされた話題作。1969年のチェコ動乱、いわゆる「プラハの春」を時代背景に、プレイボーイ医師と2人の恋人の、何ともいえない三角関係が織りなす青春物語を通して“人間の存在とはいったい何なのか？”などという哲学的ともいえるテーマを描く異色の作品だ。もちろんプラハ市内で撮影され、観光名所のカレル橋や旧市街などが登場する。動乱当時のニュース映像とトーンを合わせ撮影されたオーバーラップが見事だったソ連軍の軍事介入シーンの舞台、ヴァーツラフ広場は、今は観光客や市民の憩いの場所になっている。ジュリエット・ピノシュ扮するテレザがフォトグラファーを志してシャッターを押しまくる路面電車が通る街並みや人々の姿は今もそのまま。

そして旧市街は、中世から時間が止まったような路地やバーやレストランが軒を連ねる通りには、それこそモーツァルトさえひょっこり現れても不思議ではないムードが広がる。まだまだヨーロッパの中では物価も安いし、パドワイザーのルーツといわれる美味しいビール、「ブドワイゼル」も味わえる本当に魅惑的な街だ。



■この感じがプラハの魅力



■テレーザが写真を撮りまくる街並みはそのまま



■ヴァーツラブ広場は「プラハの春」のシンボルだ



■カレル橋では大道芸がよく似合う



■裏通りが魅力!



■独りでの夕食も退屈しない



■カレル橋たもとの家々



大ヒットシリーズ「ミッション・インポッシブル」 Vol.1の名場面はプラハ旧市街に点在

⑩プラハ(チェコ共和国)

前回に続いてプラハを歩いてみよう。中世の街並みが自慢のこの町だが、ここでのロケはクラシカルな作品ばかりではない。もうすぐ第3弾が公開される話題のシリーズ「ミッション・インポッシブル」の1作目は、ここプラハ旧市街で多くのシーンが実際の街中で撮影されている。まずはアメリカ大使館でのパーティーシーンは、ヴァーツラフ広場の端にある国立博物館内。3階から階段部分を見下ろすと、まさにあのシーンそのまま。ここをパーティ会場のように見せるブライアン・デ・パルマ監督のカット割りは脱帽ものだ。その直後、トム・クルーズ扮するイーサンらがエレベーターから脱出する裏口は、カレル橋たもとにある建物の裏で撮影。

このヴルタヴァ川沿いには重要シーンのロケ地が点在している。ジョン・ボイト扮するIMFのボス、フェルプスが川に落ちるカレル橋、それを追うイーサンが駆け上る階段、サラが殺される扉…この辺りだけでも記念写真がわんさか撮れそう。映画では、さも危険が漂うイメージだったけど、実際の川沿いは静かで落ち着ける雰囲気。ヴルタヴァ川の水がもう少しきれいだったらなあ…ということだけが残念。いつも観光客でごった返している、そんなカレル橋周辺だけど、ほとんどの人は「MIロケ地」なんてことを知らないのも、もったいないこと千万だ。

ヴァネッサ・レッドグレイヴ扮するマックスのアジトのなっているのは、ヴァーツラフ広場中央にあるホテル・ヨーロッパ。ちょっとくたびれたホテルだけれど、アール・デコ調の趣のあるムード。1階はレストランになっていて、ローストポークがけっこういける。

…というように、「MI」だけに絞ってロケ地巡りをしても、けっこう楽しめる街、プラハ。あなたも諜報部員になったつもりで、自動的に消滅しないポータブルDVD片手に街を探索するのも面白い。きっと、「ここだあ!」と、歓声をあげること請け合いだ。



■脱出口は全然違うカレル橋対岸の建物の裏手(これが映像編集の醍醐味)



■イーサンの駆け上がる階段



■霧に包まれた川沿いのシーンはこちら



■そしてサラが殺された…



■マックスのアジがあったホテル・ヨーロッパ



「M:i:3」。ベルリンに始まり、バチカン市国 そして上海でのミッションがクライマックス

⑰上海（中国）

話題作「M:i:3」。やっぱり期待を裏切らない、ハラハラ・ドキドキ連続のすばらしい出来映えだ。今回は、そんな新作のロケ地を検証。ローマ、バチカン市国でのミッション・シーンでは、有名なサン・ピエトロ寺院、そしてバチカン美術館が登場。そして、難なく武器ブローカー、デヴィアンを捕まえた後はモーターボートでテヴィレ川から脱出。そのシーンでちらりとサン・タンジェロ城が見える。中世の頃までローマ法王を守る要塞となっていたそうで、18世紀には牢獄でもあったそう。 「M:i:3」のロケにはぴったりのエリアかも。

そして後半は一転して、舞台はなぜか上海に。本当は東京を舞台に設定したかったそうなのだが、撮影許可の厳しい東京でなく上海を選んだのだとか。そんな上海で最初に出てくるのが、超高層ビルでのイーサンのアクロバティックなミッション。このエリアは、お馴染みのテレビ塔など、近未来的なスカイラインが特徴の浦東地区。ホント、SF映画に出てくるようなカタチのビルも多いけど、個人的にはもうひとつ魅力を感じない。まあ、好みの問題かも。世界屈指の建設ラッシュを誇る上海は、昔ながらの下町がどんどんなくなって、日本とはスケール違いのそんな超高層ビルが次々と、雨上がりのキノコのように建っていく。

でも、やっぱりラストシーンの街並みの方が味があって好きだ。イーサンが屋根から飛び降りて川沿いをダッシュするシーンや最後に奥さんと散策するラストなんか観ていると、旅心をくすぐられる。そのロケ地は多分、上海の西90kmに位置する水郷の街、西塘。昔から「生活着的千年古鎮-西塘～生きている千年歴史の街～」と言われているそうだ。でもここでのシーンが原因なのか、街の描き方が下町過ぎるとのことで、「M:i:3」は中国では未だ上映無期延期措置だそうだ。下町や古い街並みの方が風情があっていいのに。カメラのファインダーを覗くとそのことがよく分かる。パリでもロンドンでもNYでも、絵になるのはやっぱりダウンタウン。そんな場所がなくなっていくのは本当に残念だ…。



■未来的?あんまり好みではないけど…河も泥色だし(2019撮影)



■「豫園」くらいしか、上海に観光資財はないのでは?



■もうこんな街並みは無くなっているだろう…



■紫禁城太和殿

「ラストエンペラー」溥儀が人生を翻弄させられた紫禁城。そんな北京のスケールはやはり凄い

⑱北京(中国)

前回の上海に続くは中国の首都、北京。とくれば、やはり代表的な映画は「ラスト・エンペラー」。巨匠ベルナルド・ベルトリッチ監督が中国最後の皇帝、溥儀の一生を耽美的に描いた歴史大作。アカデミー賞10部門など1987年の賞を総なめしたことも凄いが、やはりいちばんの話題は舞台となった紫禁城に史上初めてカメラが入ったことだ。重厚な映像と紫禁城のスケールを余すところなく伝えるベルトリッチ監督の手腕はさすが。でも少々脚色が過ぎているところと坂本龍一氏らの登場シーンが壮大な歴史絵巻を何となくスケールダウンさせている感を受けるのは私だけだろうか。それと全員英語で喋っているのが、なんか変。でもそんなことを差し引いても映画としては充分素晴らしい作品だ。

そのロケ地は今や「故宮博物館」という名前になっているが、かつて、500年もの間24人の皇帝が君臨していた「紫禁城」だ。敷地面積72万m²になんと9000もの部屋があるという世界最大規模の宮殿。まさに世界、いや小宇宙の中心という思想の元に作られたらしいが、その中に佇むとそれが実感できるほどのスケール感だ。

まず、最初にくぐる門が午門。母の死に立ち会えなかった溥儀が失意の中で可愛がっていたネズミを投げつけるシーンが鮮明に記憶に残っている。そしてその先にドーンと鎮座する太和殿。1908年、溥儀がわずか3歳で皇帝に即位した戴冠式が行われた場所で、映画でもその壮大なシーンが印象的だった。

そんな紫禁城も凄いが、三千年以上の歴史に根ざした北京は、やはり街全体のスケール感が違う。面積にしても市全体で四国に匹敵するほどの大きさ。市内の幹線道路の幅も半端じゃない。そして郊外には、これまた悠久の歴史を感じる事の出来る、万里の長城が延々と続いている。ここに来ると、ほんと日本なんてちっぽけな国だなあとつくづく感じてしまう。ただ大きすぎて、何でも大味な感も否めない。でも北京ダックだけは絶対に試して欲しい。正直、北京に行くまでは北京ダックってどこが美味しいのか全く理解できなかった私だったが、本場の料理は全く別物。こんがり焼けた皮だけでなく肉の部分まで食べるとかで、これまたジューシーで最高!ロケ地巡りという目的さえ忘れてしまった北京の夜だった。



■皇帝の玉座



■溥儀がネズミを投げつける午門



■宦官たちが勢揃いしていたシーンはこちら



■万里の長城のスケールはデカすぎてか、正直いまいち実感できなかった



■天安門広場はホントに広大



■北京ダックってこんなに美味しい!日本のものとは天と地の差

The Location Around The World

volume 2 (UK/Europe/China)



All pictures and texts were published on Japanese newspaper article to introduce splendor of each sites. These are not commercial content, but only editorial use, Therefore we never invade a right of personal portrayal, any rights of structures. And this edition is only my private memories. Please accept it.

not for sale